

「皮膚を通して行う青酸療法」

福島鐵雄



『日本及日本人』の表紙と福島博士の論文

昭和初期、月刊誌「日本及日本人」に「皮膚を通して行う青酸療法」と題した論文を公開し、枇杷葉療法を世に送り出しました。後に、大阪大学や鹿児島大学などに受け継がれて枇杷研究の先駆者になっています。

この時代の論文の内容としては多くの医師や仲間から誹謗中傷を受けたと思われませんが、熟読すると先見の明があった偉大な医学者だと思えます。

この論文の「はしがき」と「緒言」他、臨床例の一部までを掲載しました。

※この論文の月刊誌「日本及日本人」は国会図書館に収められています。

福島鐵雄博士は佐賀県有田町の出身です。

へはしがき

本篇は研究開始後日尚ほ浅く、従つて不満の点のみ多き未完成の論文なり。

されば十分なる研究を経て、完全なるものとして発表せんことは、余の衷心の希望にして、着々其の準備を整えつつあり。然れども周囲の或る事情により、最も急速に発表の余儀なきに至りしは、余の頗る遺憾とする所なり。

本来本篇の如き科学上の研究は、先ず第一に学界に発表すべきものにして、本誌の如き専門外の雑誌に発表するは、山師或いは卑怯者の所為とせらるるを常とす。されば余は如何にかして、学界に発表せんと努力したれども、無名な

る一開業医が、其の研究を学界に発表することは頗る煩雜なる手続きを要し、殊に余の如く発表に急を要する場合、到底望むべくも非らず。学界以外の機会を求めざるを得ざるはやむを得ず、是れ余が此の発見の動機となれる本誌に乞ひて、発表をなす所以なり。余は此のために、特に貴き紙面を割愛せられし本誌主幹に深甚なる感謝を表せざるを得ず。

前述の如く、本論の粗雜不充分なるは、自ら充分に認むる所なり。故に余は本論の欠点多きを読者並びに編集者に謝せざるを得ず、追つて本論の更に詳細にして具体的なる研究報告は、改めて世に問うことあるべし。

〈緒言〉

従来吾人の奉じ来れる西洋医学は、我国に輸入せられてより、邦人諸学者の努力研鑽により、多大の進歩發展をなし、近来發表せらるる研究業績の如きは、其の質と量とに於いて、今や却つて欧米を凌駕するに至らんとせり。然れども少しく反省すれば、此の医学の進歩称するものも、実は真正の医学界全般の進歩に非ず、僅かに基礎医学の進歩たるに止まるものにして、医学の本領の領域たる治療方面に至りては、全く放棄せられて顧られず、学益々精しくして、治療愈々劣なるの奇現象を呈するに至れり。

今日の西洋医学が其の治療的方面に於て頗る無力にして、到底救世の具に非ず、今や全く行詰まりの状態にあるのは、心ある者の等しく知れる所なり。即ち西洋医学は唯徒らに診断のみにとらわれ、治療的方面を殆ど顧みず、最高学府の教える医学は煩雜極まる空理空論のみにして、眞の医学とは頗る縁遠きも

のと云わざるべからず。これ西洋医学が本質的に治療的方面に不適當なるを示す証左に非ずして何ぞや。

不肖余の如きは幸に最高学府に学ぶの光栄を得、卒業後更に大学に於いて、医学の實際に就き、指導を乞ふの幸運を有したりき。然れども西洋医学の無力たる到底予をして満足せしむべくもあらず。学べば学ぶ程失望し、学的良心の前に一種の自暴自棄に陥り斯くの如き無力なる医学を奉ぜんよりは寧ろ医を廃するに如かずと思ひし事一再ならず。如何にして医学本来の使命に忠実なるべきかと悶々の情に堪へざるものありき。

この暗黒的絶望期に於いて、余を救いしは大正五年十月の「日本及日本人」臨時増刊「三大巨編号」に載せられし、中山忠直氏の「漢方医学復興論」なりき。同論は従来野蛮視せられたる漢方医学の本体が、西洋医学とは比較すべくも非ざる優等なるものにして、驚くべき治療的效果を記載せり。―余は同論を讀みて、初めて漢方の偉大を知り、余の蒙は啓ひらかれ、学校以外に真正の医道の世に存する事を知り、直ちに漢方医学継続の使徒たらんことを決心するに至れり。

同誌は其の卷末に付録的に、井篋節三氏の「どんな病も枇杷の葉で」なる論文を記載せるが、余は中山氏の論文によりて西洋医学に対する一縷の希望を粉碎され、東洋医学を畏敬するの念を鼓吹こたいされ居たるを以て、直ちに非篋氏の奇蹟を説く如き実験報告に驚き、漢方の復興運動に参加する前に、其の枇杷葉療法の実績を見んと決心したり。

枇杷葉療法とは遠州浜松の近村氣賀の河野大奎禪師が行へる枇杷の葉にて万

病を治する方法なり。当時余は北海道札幌の鐵道病院に赴任して間もなかりし時なるが、求道の情熱たえ難きものあり、僅かに旅装あわただしく、名古屋に走りて、真に奇蹟が此の地上に実在せる事の、不可思議に打たれたり。

而して余の興味は枇杷葉療法は何故に斯くの如き偉大なる効果を奏するかと云う「何故に」と云う事に集中し、之を科学的に研究して意外の大発見に到達せり、吾人の今茲に論ぜんとする皮膚を通じてせる青酸療法即ち是なり。

さて吾人は標題に掲げたたる如く、此の青酸療法を「万病一元治療の可能性と理由及び其の実際」と註せり、之を詳言すれば、いかなる疾病をも唯一の薬剤即ち青酸を以て治癒し得べしと為すものなり、若しそれ、卒然として如斯かくの大問題を掲げ臨むに於いては、世人或いは狂人を以て目するやも未だ知る可らず、是の如きは、吾人の予め期したる所、むしろ之を甘受して他日大成の期を待つ外無かる可し。

我が青酸療法の主眼点は、後段詳述する如く、皮膚を通して青酸を吸収せしめて、以て疾病を治するに在り、そもそも青酸は古来周知の猛毒にして、其の生物学的作用は、既に広く研究せられ、治療上にも専ら内服或いは吸入等に止まり、皮膚を通じて吸収せしめて諸疾患治療の方法と為したるもの、殆ど文献中に発見すること能わず、然るに、偶然にも、河野禅師の枇杷葉療法は、無意識に、この方法を採用して、驚歎すべき効果をあげつつありし事、吾人今般の研究に由り開明せられたり、されば、吾人は進んで枇杷葉を棄て、全然人為的に皮膚を通じて青酸を吸収せしめ、以て各病症に試みたるに、枇杷葉療法と殆ど同程度の卓越したる効果を挙ぐることを得て、研究者予自ら驚嘆せり、実に

「皮膚を通じてせる青酸療法」を以て万病を治療せるは、所謂枇杷葉療法として、河野禅師を以て嚆矢と為す可く、吾人が初めて之を科学的に立証し得たるは、全く偶然の僥倖に過ぎず、然れども、此の療法が我国に創始されしは真に天恵として感謝すべく、吾人は其の重大なる意義を思えば自ら得意の情を禁じ得ざるもの有り。

そもそも、枇杷葉療法は、後段に於いて紹介する如く、今より二十年前、河野禅師が其の先人より教授されたるに始まり、爾来□十万人以上の患者に就いて実験を重ね、講究の結果大成せられたるものにして、其の奏効範囲の広汎なる且つ奏効の迅速確実なる、吾人の現代医学より之を觀れば、唯々奇蹟と称するの外なく、是れ恐らく全世界の医学界が驚嘆を重ねるも尚ほ足れりと言う事を知らざる可し。

吾人は其の実行の簡易なる点、及び其の奏効の広汎且つ迅速確実なる、あたかも奇蹟的なる効果により之を觀れば、吾人□奉ずる現代医学ことに臨床医学は、まさに根本的に一大変革を生ずるに至る可く、又社会上に及ぼす各種の影響改革も亦非常のものある可きを信じて疑わざる者なり、今かりに、或る療法が、大抵の疾患に対し嚴密なる診断殊とに鑑別的診断を要せず何人と雖も多く熟練を要する事なく之を実行し得るもの有りて、しかも其の奏効の迅速確実なりとせんか、之が為に其の現代医学殊に臨床医学及び現代社会的現象に対し、如何なる影響を及ぼす可きかは、少しく常識ある何人も、推想するに難からざる可し、実に『皮膚を通じてせる青酸療法』は即ち此の好適の療法なり、従つて其の当然の帰結影響は吾人茲に贅言ぜいげんを弄する必要なかる可し。

吾人は斯かる偉大なる治療法が、長く民間に埋もれて充分に其の偉力と恩恵とを發揮するの機会無かりしは、人類の幸福より之を見て、頗る遺憾の事と為し、一日も早く世に之を紹介し且つ科学的にして最も合理的なる方法たるを知らしむるは、吾人の義務なりと信ずる者なり、而して、我青酸法の如きは、今日迄の僅少なる臨床的実験よりするも、ほぼ枇杷葉療法と同等の効果あるを知れり、しかも、吾人の研究日尚浅く、精励努力孜孜として実験研究を続けつつあるも、僅かに其の緒に就きたるのみ、前途望洋の感無くんばならず、此の秋に方より、敢て未完成のまま、之を發表せんとする所以ゆえんのものは、ひとつは、一日も早く世に斯る偉大なる医術の存在するを知らしめんが為め、ひとつは、又、如此広汎なる大問題を不肖一人の手に委ねず、世界の諸学者と興に共に研究し一時も早く此の青酸療法を完成せしめて、之を人類の幸福に資せんとする微意に他ならず、若し夫れ、枇杷葉療法が尚ほ一層進歩し、吾人の青酸療法も亦完成するに於いては、全人類を殆ど凡有あらゆるる疾患の恐怖より脱却せしめ得べく、人類の幸福之に過ぎたるもの有らざる可しと言うを得べし、吾人は斯る日の必ず近き将来に在るべきを確信し、一身を捧げて此の研究に当たらんと欲す、區々たる毀誉褒貶きげんの如きは元より吾眼中に在らざるなり。

へ枇杷葉療法を紹介

予は、我青酸療法を説く以前に於いて、所謂、枇杷葉療法の如何なるものなるやを紹介するの必要を感じずる者なり、故に左に、其の起源、方法、及び奏効

疾患の範囲並びに奏効確實性を略記し、其の臨床治験例を採録す可し。

〈枇杷葉療法の起源〉

本療法は、今より二三年前に於いて、静岡県遠州、浜松在、氣賀の里なる定光山金地院と云う一禪寺の院主河野大圭師が氏の叔父より伝授されたるものなり、枇杷葉に就いては古来幾多の伝説あり、且つ本草綱目に於いて薬用とせられ、漢方に於いて之を採用し居るは明らかなる事実なり、然るに河野禪師は卓越したる技能を以て、一種独特の療法を研究完成し、且つ、宗教的・道德的の形式を加味し、爾来幾多の施療を為し多数の難治患者を救済したり、現に氣賀及び名古屋地方を中心として行はれ、其の治療を受けたる患者数、今日迄既に延人数無慮20万人以上なりと称せり、松村八次郎氏著「奇蹟の現実」中の記事に依れば、『禪師が余の招聘に応じて名古屋に駕を向けたるは大正九年十二月二日が初回にて、自宅にて患者約四五十名、第二回より市内の寺院を借り受け毎月、十一日、十二日、の両日にて毎日百五十名乃至二百名、本年（大正十一年）二月迄十三カ月間施療を受けし者実に五千百名の多数に達しぬ』とあり、爾来昭和二年迄四カ年以上継続す、且つ又禪師が本療法の衣鉢を伝えたる数人の弟子あり、松村氏の其の一人なり、此等も興に各地方に於いて長年間の施療を為しつつあれば、二十万人以上の数、決して誇大に非ざる可し、是まさに、非凡の靈術必ず奏効せしもの有るを知るに足る、如是我聞、禪師の氣賀の里に在りし当時、此の療法の靈妙を信ずる者は、救われたる難治者のみにして、しかも、其の中全治の後は軽症なりしものとして此の療法を信ぜざるもの者もあり、其

の療法に於いて枇杷葉の表面に或経文を墨書し、或いは又使用後の葉は絶対に水に濡らすことを嫌い、若し濡るる時は回復しつつある疾患が逆帰すると称する事ある等、医師は勿論一般世人に至る迄、或いは之を非科学的迷信と為し、或いは単に精神的療法に過ぎずと為す者あり、甚だしきに至っては、現に共信者中に於いても「奇蹟の現実」中に散見する如く、御呪を以て目する等、今尚ほ此の療法奏効の実態を知らざる者あり、斯くて久しく氣賀の片田舎に在りて、本療法の光明を發揮するの氣運を有するに至らざりしは、頗る遺憾の次第と云うべきなり。

然るに、名古屋市千種の硬質陶磁器製作工場主、松村八次郎氏は、其の店員等が氣賀の禪師に依り疾患を治癒せる事実を見聞し、大正九年自ら氣賀に赴き禪師の治療を受けたるに、其の偉大なる効力と禪師の造詣に驚倒して、斯くの如き偉大なる力を有する人を、此の片田舎に蟄居せしめ置くは実に惜しむ可き事と為し、禪師に懇請し、毎月二日間名古屋市に聘して難治病者の無料救済を為す事とせり、是れ実に大正九年の事にして、其の十二月二日を第一回とし、爾来今日に至る迄、松村氏一個人の尽力より、後に信者有志の靈葉会と代わり幹旋するものを生じ、専ら弘済の施療を継続せり。

斯くて、禪師及び松村氏等に依り、幾多の奇蹟続々として表わるるに至り、其の中多少の実例を記述せしもの、是れ則ち松村氏著「奇蹟の現実」なり、吾人は今般研究の結果に依り、本療法は将来必ず相当の発展を為すべき一種の特長を有し、濟世上極めて必要なるものと確信す、幸に禪師始め諸氏の精励努力を望むや切なり、然れども現今の状態に由り之を觀るに枇杷葉療法が何故に奏

効するやの点、未だ彼等の間に不明なりを以て、禪師等は奇蹟の現実を以て科学者の無能を罵倒し、世人は誤解して其の去就を知らず、医師等は之に反感を有する態度の存在するが如し、是また頗る遺憾の事柄と云う可し、然れども今日吾人の僥倖の成功によりて此等の故障一掃され本療法の効力を謳歌するの機会到来せんとするは吾人の深く喜ぶ所なり。

〈枇杷葉療法の方法〉

本療法の方法は大略左記の如し。

新鮮なる枇杷葉（就中新芽よりも古緑葉を良とす）の表面に墨汁を以て、或いは経文を筆にて書き塗りたるものを、火鉢等の炭火に炙り、之に適當の温度を与えたる時、直ちに之を以て患部に当て揉む、但し、普通二枚を同時に温め左右の手にて之を用ゆ、更に之を詳説すれば、外科的疾患に対しては患部のみを、又内科的疾患に対しては、先ず臍下丹田を始めとして腹部を主とし、或いは胸部、頸部、頭部、顔面、背部、腰部、四肢等、各其の疾患に応じ揉むものなり、然れども決して按摩「マッサージ」の形式に非ず、或いは又耳口眼鼻の疾患に対しては、温めたる葉上に呼気を吹き当て送入するなどの事あり、斯くのごとし、本療法は一見頗る簡単なるが如きも、其の実ある具合ありて、其の効力普通人の手によりては容易に禪師等に及ぶ能わざるは事実なり、是れ多年の経験上の技能に職由する者なる可し。

〈枇杷葉療法の奏効範囲と其の奏効確実性〉

本療法の疾患に関する奏効範囲の広汎なると、其の奏効の迅速確実なるは、真に天下無雙と称すべきものにして、予が本療法に驚嘆する所以のもの亦実に此の点に存す、松村八次郎氏は河野禪師に謀り、大正十一年六月「奇蹟の現実」と題する一書を著述せり、其の趣旨の要点は、施術を受けし者非常に多数に上り、其の効果の如何は患者自身の実験に依りて之を証明し得べく、是を悉く列挙するには余りに多数にて煩雜に苦しむを以て、山積の礼状中数十通を挙げ、又（松村氏）自ら十数人に施したる効果を述べ、且つ枇杷葉使用法を付記して「奇蹟の現実」と題し、「之を以て世の真理的研究資料及び済世的資料として公表せんと欲する」旨を記述せり、故に其の列挙せる臨床治験例は僅かに百例内外に過ぎず、而も其の列挙する所のものは主として奇蹟的效果の記録にのみ捉われたる傾向あり普通軽症のものを逸せり、加之同君は医学的専門家に非らざれば、其の病症状等分明ならざるは、已むを得ざる所、従つて此の整理分類には頗る困却せり、然れども其の個々の治験例に就き按ずるに、若し果たして其の記述の如しとせば、奏効範囲の広汎なると、奏効の迅速確実なること、現代医学に於いて奇蹟なりと認む可きもの頗る多し、予は、昨年以來河野禪師とは再び会見の機会を得ざりしも、此の著者松村氏とは幸に往復し、数回多時緩談するの幸機を有したるが、人格的紳士にして世の売名射利の徒と大に異なる所あるに敬服す、故に予は此の著述中の事実に関しては相当の信用を措くものなり、由是予は系統的に其の事実を適録し、本療法の臨床的実験例として之を後段に記述せんを浴す。

〈其の奏効範囲の臨床的実験例〉

本療法の奏効範囲の概略を示す為に、左の如く分類す、但し、「奇蹟の現実」及び□補再訂に列挙されたるに據る。

分科	例数
第一、内科的疾患	六一
第二、外科的疾患	貳一
第三、小兒科的疾患	貳
第四、産婦人科的疾患	壹三
第五、眼科的疾患	四
第六、皮膚科、及泌尿器科的疾患	八
第七、精神科的疾患	壹
第八、整形外科的疾患	壹〇
第九、耳鼻咽喉科的疾患	貳
第十、齒科的疾患	壹
合計	壹貳三

※啓蒙 道理にくらい者や知識に乏しい者を教え導く

※贅言 くだなことを言うこと また、その言葉

※毀誉褒貶 褒めたりけなしたりする世間の評判のこと

※如是我聞 「このように私は仏から聞いた」という意。転じて、人から聞いたことをそのまま信じて疑わないこと。

※御呪を以て目する おまじないで判断する

※造詣 その分野についての広く深い知識や理解、また、すぐれた技量。